

奥武蔵回帰

新田 由紀子

奥武蔵といえば、子供の頃から遠足や家族連れでよく訪れた緑豊かな丘陵地帯だ。その中央を流れる高麗川源頭の山を貫いて、西武線が秩父まで延伸したのは一九六九年のこと。沿線住民とはいえ、地元より奥には足の向かない都心志向の年齢になっていたが、池袋から矢のように鈍行駅を通過していくレッドアロー号を見て、ワクワクとしたものだ。

働き盛りの頃は、休日ごとのハイキングが会社勤めの憂さ晴らしだった。早朝に都心を出発するツアーバスに乗れば、憧れの百名山でもどんなアクセスの難しい山でも運んでくれる。新幹線とバスを使えば、何泊もの山旅へも行ける。北や南のアルプスも登った。歴史や風習を秘めた山々も歩いた。火山の山懐の秘湯も訪ねた。そうなると、休日の西武線にハイキング姿ではしゃぐ若者やピクニックの子連れを見ると、山らしい山も知らないでアホみたい。奥武蔵くんだりで、マイカーひしめくグリーンラインの茶店でソフトクリームやジンギスカン食べてなにが面白いんだか、と。

いつしか自分も年をとった。膝が痛い、息が切れる、トイレが近い。コースタイム通りに歩けないで遅れる。大きな山のツアーには行けそうもなくなった。そこへ、このコロナ禍だ。背中にザックをそびやかにして不要不急の登山には出かけられないし、仲間も誘えない。

ならば、近場があつたのだ。西武線に乗って小一時間、気楽に一人で奥武蔵。そこかしこに散らばる記憶のかけらを拾いながら歩く。朝寝坊をしたって、コース変更はいくらでもできる。五百峰の顔振峠を越えて東武線側へ出るルートは、峠でお弁当食べてハイカーファッションをたっぷり観察して、ぶらぶらと西武線まで戻ればいい。三百峰を三つ越える縦走路は、峰を一つだけにする。いたるところにめぐらされた仕事道を降りて、村の名物うどんやビール飲んで駅に戻ってもまだ陽は高い。

「いざ登山」と気負わずに行ける里山がずっと奥武蔵で待っていてくれた。